

チ ョ ー サ ー の 時 代 批 判

— *The Former Age* の解釈 —

西 田 栄 毅

I

この詩は“Boethian lyrics”と一般的に呼ばれている詩群の中のひとつであり、事実、『哲学の慰め』（Ⅱ，m. 5）との類似が顕著に認められる。そのため、

The poem has variously been described as an exercise in translation, a bundle of borrowings, an exercise in restating a philosophical theme and idea taken from Boethius's *De Consolatione*.¹⁾

と、J. Norton-Smith は従来 of この詩に対する評価を批判的に総括した。しかし、W. W. Skeat の指摘している通り、その類似の箇所が見られるのは最初の四連までである。²⁾ その他に、『変身物語』（Ⅰ，89-112）や『薔薇物語』（Ⅱ，8395-8492）や『神曲』の「煉獄篇」（ⅩⅡ，148）などからの影響も認められる。³⁾ こうした影響の痕跡の存在はチ ョ ー サ ー の作品全体にわたって指摘し得ることで、この詩に特有のことではない。他方、この詩を Aage Brusendorff はチ ョ ー サ ー の未完の草稿と見做した。⁴⁾ また、“Boethian lyrics”の中の幾篇かの詩を“specific occasions”と結び付けようとする試みも行われてきたが、渉々しい成果をおさめているとは言えないようだ。⁵⁾

本論の目的は、以上のようなこれまでの研究を踏まえつつ、時代批判という、平凡ではあるが、過去から現代に至るまで決して絶えることなく、各々の時代

に警鐘を鳴らし、人の本来あるべき姿を示し続けてきた精神の表出が、チャーサーのこの短い詩にいかにか発現しているかを探ることにある。しかし、特定の歴史的事実に附会させるという手段はとらない。チャーサーは、時々指摘されるように、現実の出来事に対して無関心あるいは超然としていた、という意見に与するからではなく、この詩自体がもっと一般的あるいは本質的な次元から人間のあり方を照射している、と考えるからである。

II

第1連と第2連では、古代人の食生活における儉しさが描かれる。その生活は、大地と自然の恵みによって得られるものに満足し、かつ、各自が我欲をだして必要以上に所有したり、貯蔵したりしないものである。彼らは引き臼も製粉機も知らず、玉蜀黍の種を播くことも土地に畔を作ることも、火打ち石で火を起こすこともいまだ知らなかった。山査子や櫨などの木の実や果実を食べ、冷たい泉の水を飲んでいた。こうした原始的生活が讃えられ、渴仰されるその対極に、飽食してなお足ることを知らず、日々贅を求めて狂奔している、浅ましいチャーサーの同時代人の姿を想起するのは容易である。⁶⁾ここに描かれた古代の食生活が表象しているのは、静謐な単純性あるいは無欲性であり、批判の対象となっているのは激越な貪欲性あるいは貪婪性である。古代の人々は余分なものを一切欲せず、生命の維持に必要な最小限度のものの摂取で満足して、なお“A blisful lyf”を営んでいた、と断じられる時、読む者の心にはこの痛烈な皮肉に対する反感と共感が生じるだろう。しかし、その反感も共感も最終的には現実の生活の中に搦め捕られて、消失してしまわないまでも、静止あるいは仮死の状態のまま放擲されるだろう。人間のあるべき理想の姿を理解することと、それに向かって鋭意努力することとはべつものである、と個人の内部では区別されているのである。個人のこの利己的理解がこれまで良心的に警世を発してきた人々の批判の障害となってきた長い歴史の一端には、たとえば、聖書を読むだけでも触れることができる。薬味を添加した葡萄酒や“sausage of

galantyne”を覚えた舌から、それらを奪う難しさが個人の現実である。⁷⁾

しかも、人間の欲望は飲食物に留まらず、他の物にもその貪婪性の牙を研ぐ。

No mader, welde, or wood no litestere
 Ne knew; the flees was of his former hewe;
 No flesh ne wiste offence egge or spere.
 No coyn ne knew man which was fals or trewe,
 No ship yit karf the wawes grene and blewe,
 No marchaunt yit ne fette outlandish ware.
 No trompes for the werres folk ne knewe,
 Ne toures heye and walles rounde or square.

(17-24)

技術や文化や経済の発達とともに、人間が清貧に安んじる心を忘れ、あるいは失っていった結果、何が生じたか。我欲と我欲の軋轢、すなわち、争いである。商人は金 (coyn) を儲けるために、競って大海原を航海して外国の珍しい品物を持ち帰り、人々は財産の所有を主張し、他からの攻撃を恐れて周囲に城壁を廻らすようになる。

争いはいかなる “profit” も “richesse” ももたらしはしない。それにも拘らず、人間はこの浅ましい愚行を繰り返して、止まるところを知らない。したがって、それだけ詩人の憂いは深く、嘆きは切実だと言える。それは、第4連中に記された以下の詩行に示されている。

... cursed was the tyme, I dare wel seye,
 That men first dide hir swety bysinesse
 To grobбе up metal, lurking in derknesse,
 And in the riveres first gemmes soghte.

(27-30)

“the former age”の描写がオウィディウスの描いた黄金の時代を彷彿とさせるように、第4連は、チョーサーが鉄の時代の記述を意識しつつ書いたと思わせるところがある。⁸⁾ 鉄の時代になると、人間の関係は以下ようになる。

Men lived on plunder. Guest was not safe from host, nor father-in-law from son-in-law; even among brothers 'twas rare to find affection. The husband longed for the death of his wife, she of her husband; murderous stepmothers brewed deadly poisons, and sons inquired into their fathers' years before the time. Piety lay vanquished, and the maiden Astraea, last of the immortals, abandoned the blood-soaked earth. ⁹⁾

こういう状態は、ボエティウスの言葉を借りれば、“love slakede the bridelis”¹⁰⁾ということになる。このような否定的な時代認識は、チョーサーの本領ではないかもしれないが、そういう世相を時代の悲しい一断面として受容せざるをえない現実があったであろう。¹¹⁾ 彼は古人の書物を繙き、そこに記されていることがらが彼自身の時代の状況とあまりにも酷似しているのに、驚きを禁じえなかったかもしれない。鉄の時代の特徴としてオウィディウスが挙げた欺瞞、不実、裏切りなどのもろもろの悪徳の名称や例証を、彼はこの連では簡明に“sprong up al the cursednesse / Of coveytyse, that first our sorwe broghte!”という言い方のなかに凝縮させて、第6連と最後の連で悪徳と神話及び聖書中の人物名を述べるに留めている。

以上のことから、諸悪の根元は人間の貪欲性あるいは貪婪性にある、とここでは捉えられていることが明らかであろう。

III

ボエティウスは“the lady Philosophy”からプラトンの口を通じて教えられ

た、以下のような考えに共鳴し、それを国家行政に携わるようになった時に実践しようと心掛けた。

... comune thynges or comunalites weren blisful yif they that hadden studied al fully to wysdom governeden thilke thynges; or elles yif it so befille that the governours of comunalites studieden to geten wysdom. ¹²⁾

その結果、讒訴されて投獄されてしまった。そこから、彼の思弁による現実の不条理の克服に向けた、激烈な闘いが始まる。

第Ⅰ巻では、不遇を託つボエティウス自身像が語られる。第Ⅱ巻では、運命の変動性あるいは二面性と、運命から与えられるもろもろのもの一名誉、名声、栄位、権力、財産等一の価値の過大評価によって生じる、人間の迷妄性が論じられる。迷妄に陥った人間は、人間の条件を喪失している。

For certes swiche is the condicioun of alle mankynde, that oonly whan it hath knowynge of itself, thanne passeth it in noblesse alle othere thynges; and whan it forletith the knowynge of itself, thanne is it brought bynethen alle beestes. ¹³⁾

人間は、死によって肉体が奪われてもなお滅びることのない“soules”を所有していることを自覚し、それらが真に幸福になるもの、すなわち、最高の善に到達しようと努力するのが自然の意図にかなったことである、と第Ⅲ巻では説かれる。

それでは、なぜこの世界に悪が存在するのか、しかも、その悪をなす者たちが栄え、横行し、徳に従って善をなす人々がその犠牲となり、苦しまなくてはならないのか。これに対するボエティウスの弁神論的な答えを、チョーサーは知っていたであろう。しかし、彼が時代悪化の原因を人間の貪婪性と指定した

ことで、この詩はボエティウスの批判精神に加えて、キリスト教的批判の視座の存在をも暗示する。

キリスト教の立場からの時代批判と言えば、彼自身の *The Parson's Tale* がすぐに思い浮かぶが、そこには『テモテへの前の書』の名がラテン語で挙げられ、七つの罪源のひとつである貪欲について “the roote of alle harmes is Coveitise.”¹⁴⁾ という記述がある。ところが、同じ作品の別の箇所では罪源に関して以下のように説明されている。

Of the roote of thise sevene synnes ... is Pride the general roote of alle harmes. For of this roote spryngen certein braunches, as Ire, Envye, Accidie or Slewthe, Avarice or Coveitise (to commune understondyng), Glotonye, and Lecherye.¹⁵⁾

“Pride” と “Coveitise” の何れを七つの罪源の筆頭に据えるかについて、チョーサー自身に混乱があったのか、彼の使用した原典そのものの不備なのかは明らかではない。両者に関してこのような紛らわしい表現が出てくる理由の説明を、M. W. Bloomfield に求めることはできるかもしれない— “The premier position of pride was too firm to be shaken, but greater stress was laid on avarice from the twelfth century onwards.”¹⁶⁾ いずれにしても、『テモテへの前の書』のこの一節を他のところでも引用していることから、¹⁷⁾ チョーサーが、時代の影響もあって、人間の貪婪性に浅からぬ関心があったことを示していると言えるだろう。

これまで見てきた第1連から第4連までの中には、このほかに聖書と関連した表現は見られないだろうか。ここに描かれた人々の生活は、『創世記』のエデンの園とは趣を異にしている。¹⁸⁾ 農業生産に関係したあらゆる道具、技術あるいは労働そのものさえ必要としない暮らし方のできる世界を、チョーサーは理想郷としているかのごとくである。こういう彼の態度に関して、A. V. C. Schmidt は次のような見解を述べている。

Chaucer's attitude to civilisation and technology in the poem is wholly negative; but he would not have found support, let alone inspiration, for this view in the Bible, whether or not he was familiar with Augustine's Commentary on it. For Genesis shows technology not as *caused* by the Fall, but as occasioned by it, whereas the Golden Age myth seems to describe a 'Fall' caused by *technology*.¹⁹⁾

確かに、この詩におけるチョーサーの文明や技術に対する態度は、キリスト教の伝統の外にあるものかもしれない。それにも拘らず、その非キリスト教的態度の奥底にキリスト者としての声の響きがあるのを、彼の同時代の人々は感知しなかっただろうか。²⁰⁾ 例えば、次のような聖書の言葉の響きを。

然れど足ることを知りて敬虔を守る者は、大なる利益を得るなり。我らは何をも携へて世に来らず、また何をも携へて世を去ること能はざればなり。ただ衣食あらば足れりとせん。然れど富まんと欲する者は、誘惑と罠また人を滅亡と沈淪とに溺す愚にして害ある各様の慾に陥るなり。²¹⁾

詩の表現形式上の類似を重視する観点からは、こういう解釈の生じる可能性は殆どありえまい。しかし、全体的に非キリスト教的意匠に彩られた中に、さりげなく組み入れられた聖書の言葉を連想させる表現は、²²⁾ 殆ど否定構文で占められたこの詩の中の僅かな肯定文の存在と同じく、読者に鮮烈な印象をあたえてやまない。²³⁾ あたかも、それこそが詩人その人の真の声であるかのように。

IV

第5連では暴君が批判の対象として取り上げられる。それに関連した語句として、第7連の “no taylage by no tyrannye” と、J. Norton-Smith によれば、²⁴⁾ 第8連の “Jupiter the likerous, /That first was fader of delicacye”

及び “Nembrot, desirous /To regne” を挙げることができる。暴君たちは “bagges” や “fat vitale” が豊富にある都市や村を狙って侵略したが、草薺ばかりの荒れ果てた土地などには見向きもしない、という。文脈からすれば、この連においても第4連で呪われた “metal” や “gemmes” の発見と、これまで古代にはなかったとして揚言されてきたものの場合と批判の態度は軌を一にする。ここで特に注意を引くことは、他の連では過去時制で統一されているのに、現在と未来の両時制が使用されているという事実である。国王あるいは為政者が、公的には自分の行為を正当化するためにいかに実しやかに美辞麗句を弄しても、その行為を見れば “coveytyse” の権化となり、“tyraunts” に成り果てているのが明らかな場合がある。この現在と未来の時制の使用は、読者にそれぞれの時代の悪しき為政者を想起させ、首肯させる効果がある。しかも、読者は作者から直接語りかけられているような気持ちにさせられ、かつ、聞いたことを普遍的な真理のごとく感じる。

次の連では、再び前の調子に戻り、古今の住居と寝具の類が対照的に記述される。それは “this blissed folk” が豪華な寝室も綿毛も白い敷布も知らずに、草や木の葉の上でいかに “in parfit quiete” にあるいは “in seurtee” に眠りに就いたかを示すためである。続いて、この静穏な日々、心の平安は何によってもたらされるかが明示される。

Hir hertes were al oon withoute galles;

Everich of hem his feith to other kepte.

(47-48)

上の二行の内容をもう少し敷衍させれば、チャーサーの “Boethian lyrics” のひとつである *Lak of Stedfastnesse* の最初の連のようになるのではないかと思われる。

Somtyme the world was so stedfast and stable

That mannes word was obligacioun,
 And now it is so fals and deceivable
 That word and deed, as in conclusioun,
 Ben nothing lyk, for turned up-so-down
 Is al this world for mede and wilfulnesse,
 That al is lost for lak of stedfastnesse.

(1-7)

この詩の追連には“Lenvoy to King Richard”という見出しが付されているから、リチャード二世との関連は明白であるけれども、*The Former Age* の場合は、“tyraunts”を具体的に確定できない。ただ、チョーサーの時代、特にリチャード二世の治世中必ずしも平穏とは言い難いし、王の親族間の悶着もあったようだから、²⁵⁾ 色々と推測はできる。しかし、ここではそういう特定の歴史的な事件と結び付けて考えなくとも、詩を理解する上で支障はないと思われる。

第1連から第4連までの前半は、これまで見てきたように、“the former age”と比較して文化的、経済的に発展した詩人の時代の物質的豊かさ、しかも更に食欲に求めて争いまで引き起こす精神的貧困が批判の対象になり、その最大の原因が人間の呪わるべき貪婪性にあると喝破された。他方、後半の四連は同時代の政治に批判の鋒先が向けられていると言える。“tyraunts”はその政治批判のひとつの、しかし最も重要な例証として挙げられている。なぜならば、それは“good kings”の陰画であり、この詩全体が表出している詩人の時代の負の世界像の否定性の中核に位置を占めているからである。

中世において暴君がどのような存在として理解されていたかを、詳細に調べた Margaret Schlauch の論攷の中に以下のように述べた箇所がある。

... a tyrant seeks his own weal, not the common weal; he pursues his own pleasure (*delectabilia*); he is avaricious of money to this end; and he fears to entrust himself to guards selected from his own fellow cit-

izens. The tyrant's rule is proved to be the worst possible,... and four reasons are given for this: it diverges most widely from the *bonum commune*, it is least natural, it is most efficient in working harm, and it prevents peace, concord and magnanimity of the citizens.²⁶⁾

ここに示されているのは、我欲と金銭欲と猜疑心を絵に描いたような人物像であり、たとえチョーサーがこの時代の暴君論に通暁していなかったとしても、『哲学の慰め』から十分に抱きえた心象だと思われる。こういう為政者あるいは統治者を生み出す第一要因としても、“coveytyse”は作用する力を有していることの例証と言える。

第7連では前連の終わりの二行を受けて、常にお互いに相手のことを気遣い合い、諍うことなど夢にも思わない、正しく小羊のように(lambish)心やさしい人間像が描き出される。それに続いて、“pryde”や“envye”や“avaryce”と同時に“lord”も否定されている。このような並置は現実の世界において為政者、統治者が身に帯びがちな悪徳を、読者に想起させる。ここに至れば、“the fomer age”の政治制度がいかようのものは自ずと知れる。君主としてふさわしくない者から搾取されもせず、虐げられもせず、個人の自由意志による、利他的な人間関係に基づいた共同体ということになる。これがチョーサーが同時代の政治体制の否定の極致として、この詩の中に措定した理想像の祖型と言えるかもしれない。

ニムロデは聖書への言及—“coveytyse”, “pryde”, “envye”等の悪徳の存在が暗示するとしても—を明示する唯一の要素である。『創世記』の第十一章では、彼とバベルの塔とは特に関連させて記されているわけではないが、中世においては彼は塔の建造者と見做されていた。²⁷⁾ A. V. C. Schmidt は、この聖書の要素がボエティウスやオウィディウスなどの古典を主体とした典拠の中に含まれていることから生じる違和感を解消させるべく、次のような解釈を提示している。

...I would say that what Chaucer has done is, if not to 'demythologise', then, at any rate to "debiblicise", the personage called Nimrod who now becomes an almost purely symbolic figure operating on the same imaginative plane as Jupiter.... 'Nembrot', far from confusing the picture of the Golden Age evoked by Chaucer, is subtly integrated with classical image as a cultural emblem of clearly definable value.²⁸⁾

ひとつの文学作品がいかに古典に題材を採り、古典的意匠を凝らしていても、聖書の言葉を連想、想起させる字句を前にして、キリスト教の洗礼を受けた者がその意識の中から聖書の観念を払拭して果たしてそれに向かいうるかどうか、甚だ疑問である。チョーサー及びその同時代の人々がオウィディウスやボエティウスを読む場合も、また、現代の読者がチョーサーの作品を読む場合にも、これは無視できない問題である。

ニムロデも聖書を想起させるその他の悪徳も存在しない時代として、チョーサーが描出した理想的な世界には、神も信仰も存在しないのだろうか。オウディウスは黄金の時代をサトゥルヌスの支配する時代と述べているが、この詩にはそういう明確な記述はない。ただ、第7連の "Humblesse and pees, good feith the emperice" という後半の一行を欠いた部分から推測することはできる。²⁹⁾ この一行は単に人間関係のみならず、それを措定した力の存在をも示唆していると思われる。いや、この詩に描かれた世界像自体が、神とかキリストとかいう語が全く使用されていないにも拘らず、その存在を暗示する構造となっている。Henry Chadwick 教授は『哲学の慰め』について次のように述べた。

The *Consolation* is a work written by a Platonist who is also a Christian, but is not a Christian work.

Nevertheless, I think it a work written with the consciousness of Augustine standing behind the author's shoulder, so to speak.³⁰⁾

この詩にも同様のことが言える。但し、ここで意識されているのは、アウグスティヌスを含むキリスト者の理想とする世界像であろう。

V

『哲学の慰め』が幾世紀にもわたって読み継がれた理由の一つには、ボエティウスの批判が彼自身の不遇を託つ個人的不平や不満に留まらず、時代を超えた普遍的真理の高みまで昇華されていることが挙げられる。チョーサーのこの詩を書く動機のなかに個人的不満—たとえ、それがあったとしても—を探し求めることは、この詩自体の価値を高めも、低めもしない。要は、時代を超えて読む者の共感を獲得し得るだけの真理の表出があるか否かである。

この小詩は、チョーサーの眼に映じた彼の時代の歪な部分に対する、嘆きと批判を表わしている。オウィディウスやボエティウスの描いた、原生的ではあるが素朴な時代の生活とこれを対置させた時、その隔絶が根源においては人間にとって全く無意味なものであるという認識が、彼に否定構文の多用を促したのかもしれない。しかし、それによってひとつの人間の共同体の原型的な像が、贅肉が削ぎ取られるがごとくに、浮彫りにされる過程は鮮やかである。しかも、その過程において聖書を想起させる語句が適宜挿入されているため、読者はキリスト教的精神生活を想像することができ、異教的時代に対する違和感が緩和されている。チョーサーに当時の聖職者たちの墮落が見えていなかったわけではない。聖職が世俗の他の職業と同じく、立身出世の具の位置まで墮していることを承知していたことは、『カンタベリ物語』からも明らかであろう。それにも拘らず、*The Parson's Tale* でその掉尾が飾られていることから明かなように、根底のところではキリスト教の精神そのものに対する彼の信念は、少しも揺らぐことはなかった。そして、彼の時代に対する厳しい批判も、憂いもそこから発している、と言える。

註

- 1) "Chaucer's *Etas Prima*," *MAE*, 32 (1963), 117.

- 2) *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (1899; rpt. London: Oxford University Press, 1972), Vol.I, p.79.
- 3) *Ibid.*, p.539. Cf. J. Norton-Smith は Eustache Deschamps の影響を指摘している。118-19.
- 4) *The Chaucer Tradition* (London: Oxford University Press; Copenhagen: V. Pio. and Povl Branner, 1925), p.293. Cf. G. B. Pace, "Four Unpublished Chaucer Manuscripts," *MLN*, 63 (1948).
- 5) L. D. Benson, ed. *The Riverside Chaucer based on the Works of Geoffrey Chaucer*, ed. by F. N. Robinson (Boston: Houghton Mifflin, 1987), p.635. 以下 Chaucer からの引用は上掲書による。
- 6) Cf. *Truth* 及び John Gower, *Confessio Amantis* の "Prologus," in *The English Works of John Gower, EETS*, ES 81, ed. G. C. Macaulay (1900; rpt. London: Oxford University Press, 1969).
- 7) A. V. C. Schmidt は "Chaucer and the Golden Age," *EIC*, 26 (1976), 103 の中で, "The tone of certain lines sounds, indeed, decidedly anti-courtly —e.g. the allusions to dainty eating-habits in lines 15 to 16—" と述べている。
- 8) Cf. J. Norton-Smith, 119.
- 9) *Ovid: Metamorphoses*, The Loeb Classical Library No.42, trans. F. J. Miller, rev. ed (1921; rpt. London: William Heinemann; Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1971), I, 146-150.
- 10) *Boece*, II, m. 8, 16-17.
- 11) Cf. *Lak of Stedfastnesse* 及び Paul Johnson, *The Life and Times of Edward III*, Kings and Queens of England, ed. Antonia Fraser (London: Weidenfeld and Nicolson, 1973).
- 12) *Boece*, I. pr. 4, 27-32.
- 13) *Ibid.*, II, pr. 5, 148-54.
- 14) X, 739. 欽定英訳聖書ではこの部分は "the love of money is the root of all evil" (I Tim. VI, 10) となっている。ボエティウスの人間の貪婪性への言及とチョーサーの訳は以下の通りである。なお、原文のラテン語の引用は *Boethius: Tractates, De Consolatione Philosophiae*, The Loeb Classical Library, No.74, rev. ed. (Cambridge, Mass.: Harvard University Press; London: William Heinemann, 1973) による。

Sed saevior ignibus Aetnae
Fervens amor ardet habendi.

But the anguysschous love of havynge brenneth in folk more cruely than
the fyer of the mountaigne of Ethna that ay brenneth. (II, m. 5, 31-33)

- 15) X, 388.
- 16) *The Seven Deadly Sins: An Introduction to the History of a Religious Concept, with Special Reference to Medieval English Literature* (1952;

- rpt. East Lansing: Michigan State University Press, 1967), p.95.
- 17) Cf. *The Tale of Melibee*, VII, 1130, 1840, 及び *The Pardoner's Tale*, VI, 334.
 - 18) Cf. J. S. P. Tatlock, *The Mind and Art of Chaucer* (1950; rpt. New York: Gordian Press, 1966), p.84.
 - 19) "Chaucer and the Golden Age," 113.
 - 20) *Ibid.*, 103.
 - 21) 『テモテへの前の書』第六章六一九節
 - 22) Cf. John Gardner, *The Poetry of Chaucer* (Carbondale: Southern Illinois University; London and Amsterdam: Feffer and Simons, 1977), p.95.
 - 23) J. Norton-Smith, 122.
 - 24) *Ibid.*, 121. Cf. A. V. C. Schmidt, "Chaucer's *Nembrot*: A Note on *The Former Age*, *MAE*, 47 (1978), 304-05.
 - 25) Cf. F. N. Robinson, ed., *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (1957; rpt. London: Oxford University Press, 1974), p.860, 及び *The Riverside Chaucer*, p.635.
 - 26) "Chaucer's Doctrine of Kings and Tyrants," *Speculum*, 20 (1945), 139-40.
 - 27) *The Riverside Chaucer*, p.1083.
 - 28) "Chaucer's *Nembrot*," 307.
 - 29) F.N. Robinson は Explanatory Notes (p.860) で Skeat, Koch, Brusendorff による補筆の例を列举している。
 - 30) *Boethius: The Consolations of Music, Logic, Theology, and Philosophy* (Oxford: Clarendon Press, 1981), p.249.